

層コホモロジー

大柴寿浩

1 はじめに

凡例

次の記号と用語について断りなく用いることがある。

- 始対象と終対象：圏 \mathbf{C} に始対象が存在するとき $\emptyset_{\mathbf{C}}$ とかき，終対象が存在するとき $\mathrm{pt}_{\mathbf{C}}$ とかく．零対象は $0_{\mathbf{C}}$ ，または単に 0 とかく．

2 層

層については，[Sh16, KS90] にまとまった解説がある．

2.1 簡単な例から

層を考える雛形として，ガウス平面上の関数環を考える． \mathbf{C} をガウス平面とする． \mathbf{C} の開集合 U に対し，

$$\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) := \{U \text{ 上の正則関数} \} \quad (2.1)$$

とおく． $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U)$ の加法と乗法を $(f+g)(z) = f(z) + g(z)$, $(fg)(z) = f(z)g(z)$ で定めることで， $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U)$ は環になる．複素数倍 $(cf)(z) = cf(z)$ も考えれば線型空間，もっというと \mathbf{C} 代数にもなっている．

U と V を $V \subset U$ をみたす \mathbf{C} の開集合とする． $f \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U)$ に対し $f|_V \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$ を対応させることで環の射

$$\rho_{VU}: \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V); \quad \rho_{VU}(f) = f|_V \quad (2.2)$$

が定まる．この射を包含写像のひきおこす制限射 (restriction morphism) とよぶ．

今度は U と V を $U \cap V \neq \emptyset$ をみたす \mathbf{C} の開集合とする．複素関数論では，次の事実を学ぶ． $f \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U)$, $g \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$ に対し， $U \cap V$ で $f = g$ となるとき， $U \cup V$ で定義された正則関数 $h \in \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V)$ で

$$h|_U = f, \quad h|_V = g$$

となるものがただ一つ (!) 存在する.

以上の現象を眺めるために, ここで線形代数の眼鏡をかける. U と V を $U \cap V \neq \emptyset$ をみたす \mathbf{C} の開集合とする. 次の列を考える.

$$0 \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V) \xrightarrow{\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)}} \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V) \xrightarrow{\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V}} \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cap V). \quad (2.3)$$

ここで, $\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)}: \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$ は $U \cup V$ 上の関数 f に対し $f|_U$ と $f|_V$ の組 $(f|_U, f|_V)$ を対応させる射である. ただし環 A と B に対し, $A \oplus B$ は単位元を持つ環と単位元を保つ射の圏 **Ring** における有限積である.*¹

上の列の $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V)$ の部分空間 (部分環) $\text{Ker}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$ は $U \cup V$ 上の関数 h で $h|_U$ と $h|_V$ がどちらも 0 となるものの全体である. そのような h は 0 しかないので $\text{Ker}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)}) = 0$ となる. つまり $0 \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$ は完全である.

今度は $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V)$ の部分に注目する. $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V})$ は U 上の関数 f と V 上の関数 g の組 (f, g) のうち $U \cap V$ 上での値が一致するものの全体である. 他方, $\text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$ は U 上の関数 f と V 上の関数 g の組 (f, g) のうち, $U \cup V$ 上の関数 h を用いて $f = h|_U, g = h|_V$ とかけるものの全体である. (f, g) を $\text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$ の元とする. このとき $U \cup V$ 上の関数 h を用いて $(f, g) = (h|_U, h|_V)$ とかける. この h に対し $f|_{U \cap V} = h|_{U \cap V} = g|_{U \cap V}$ が成り立つので (f, g) は $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V})$ に属する. したがって, $\text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)}) \subset \text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V})$ が成り立つ.

(f, g) を $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V})$ の元とする. このとき, $f|_{U \cap V} - g|_{U \cap V} = 0$ すなわち $f|_{U \cap V} = g|_{U \cap V}$ が成り立つ. 上で説明した通り, このとき $U \cup V$ 上の関数 h を用いて $(f, g) = (h|_U, h|_V)$ とかける. したがって, (f, g) は $\text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$ に属する. よって, $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V}) \subset \text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$ も成り立つ. 以上より, $\text{Ker}(\rho_{(U \cap V)U} - \rho_{(U \cap V)V}) = \text{Im}(\rho_{U(U \cup V)} \oplus \rho_{V(U \cup V)})$, すなわち, $\mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cup V) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U) \oplus \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(V) \rightarrow \mathcal{O}_{\mathbf{C}}(U \cap V)$ も完全である. つまり, 正則関数の制限と解析接続に関する以上の現象は, (2.3) が完全列であると言い換えることができる.

2.2 層

X を位相空間とし, $\text{Open}(X)$ で X の開集合全体のなす集合を表す. $\text{Open}(X)$ は開集合を対象とし包含写像を射とする圏になる.

定義 2.1. X を位相空間とする. X から圏 \mathbf{C} への前層 (presheaf) とは, $\text{Open}(X)$ から \mathbf{C} への反変関手で始対象 \emptyset を終対象 $\text{pt}_{\mathbf{C}}$ にうつすものである. すなわち, X から圏 \mathbf{C} への前層 \mathcal{F} は次の

*¹環の圏についてのコメント. 環の圏における積は一般には直積 $A \times B$ であり, 有限の積が直和 $A \oplus B$ である. 積の添字圏として有限圏を取れば $A \oplus B$ と $A \times B$ は一致する. (直和は **Ring** の余積ではない!) **Ring** における余積はテンソル積 $A \otimes_{\mathbf{Z}} B$ である. 一般に $A \times B$ と $A \otimes B$ は同形ではないため, **Ring** はアーベル圏ではないことにも注意. (始対象は \mathbf{Z} で終対象は 0. したがって **Ring** には零対象が存在しないのでアーベル圏ではないという議論もできる.)

データからなる.

- X の各開部分集合 U に対する圏 \mathcal{C} の対象 $\mathcal{F}(U)$,
- 部分開集合の各組 $V \subset U$ に対する \mathcal{C} の射 $\rho_{UV}: \mathcal{F}(U) \rightarrow \mathcal{F}(V)$ で, 次の条件 (1)–(3) を満たすもの.
 - (1) $\mathcal{F}(\emptyset) = 0$,
 - (2) $\rho_{UU} = \text{id}$,
 - (3) $W \subset V \subset U$ ならば, $\rho_{UW} = \rho_{VW} \circ \rho_{UV}$.

元 $s \in \mathcal{F}(U)$ を \mathcal{F} の U 上の切断 (section) という. $s|_V$ で $\rho_{UV}(s) \in \mathcal{F}(V)$ を表し, s の V への制限 (restriction) とよぶ.

3 超関数

実解析多様体 M 上の超関数の層 \mathcal{B}_M は自然に分布の層 \mathcal{D}_M を含む. また, \mathcal{B}_M は脆弱層 (すなわち, 制限射が全射) であるという著しい性質がある.

はじめに M が実数直線 \mathbf{R} の開区間である場合を考える. X を複素直線 \mathbf{C} における M の開近傍で $X \cap \mathbf{R} = M$ をみたすものとする. $\mathcal{O}(U)$ で開集合 $U \subset X$ 上の正則関数の空間を表す. M 上の超関数の空間 \mathcal{B}_M は次で与えられる.

$$\mathcal{B}_M := \mathcal{O}(U - M) / \mathcal{O}(U). \quad (3.1)$$

\mathcal{B}_M はここで取った近傍 U に依らない. したがって, 次のように余極限を用いて定義するのがよい.

$$\mathcal{B}_M := \operatorname{colim}_{U \supset M} \mathcal{O}(U - M) / \mathcal{O}(U). \quad (3.2)$$

ここでの余極限を \mathbf{F}

参考文献

- [Sh16] 志甫淳, 層とホモロジー代数, 共立出版, 2016.
- [KS90] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, *Sheaves on Manifolds*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 292, Springer, 1990.
- [Og02] 小木曾啓示, 代数曲線論, 朝倉書店, 2022.